

# 兵庫県立考古博物館の開館に至るまで

山下史朗

## はじめに

兵庫県立博物館は平成19年（2007）10月に開館し13年あまりが経過した。このたび米寿を迎えられた石野博信名誉館長には、博物館整備についておよそ30年前の構想段階から今日に至るまで様々な形でご尽力いただいていた。あらためて感謝申し上げるとともに、博物館の設立に関わったものとして、この機会にその経緯をまとめておきたい。なお、展示制作については考古博物館研究紀要第11号に詳しく経緯がまとめられているので、ここでは主に施設整備について述べたい<sup>(1)</sup>。

## 1 高度経済成長期における発掘調査の激増

昭和39年の東京オリンピックを契機とした高度成長期には、公共工事が盛んに行われたことから埋蔵文化財発掘調査が必要になる事案が少なからず発生した。県教育委員会に埋蔵文化財専門職員が配置されたのは昭和41年（1965）のことで、その第1号が石野名誉館長だと伺っている。昭和40年代の県内では山陽新幹線や中国自動車道や圃場整備事業等に伴う調査が行われていたが、まだ比較的規模は小さかった。昭和50年代になると文化財保護法が改正され埋蔵文化財に関する保護措置が強化されたこともあるが、開発事業は増加かつ大規模化し、太子龍野バイパスや山陽自動車道、近畿自動車道舞鶴線、北摂ニュータウン、神戸国際港都田中地区特定土地地区画整理、青野ダム建設が、平成になってからは、本州四国連絡橋神戸鳴門ルート、山陽自動車道（神戸～姫路）、北近畿自動車道など、大型のプロジェクトが次々と立ち上がり、埋蔵文化財の発掘調査件数はうなぎのぼりの状況が続いた。これらの発掘調査には膨大な経費がかけられるとともに、その調査体制整備も図られた。

この間、県教育委員会で発掘調査を所管するのは文化課、文化財保護課、社教・文化財課、社会教育・文化財課と名前を変えたが、発掘調査の拠点事務所は、現在の県公館から灘区王子動物園内にあった王子分館を経て、昭和56年（1981）9月には明石市魚住分館に移転していた。このころには兵庫県でも全国で整備が進んでいた埋蔵文化財センター開設を目指しており、昭和59年（1984）8月になって、ようやく神戸市兵庫区荒田町の旧社会保険診療報酬支払基金事務所建物を買収し、埋蔵文化財調査事務所として発足した。組織上はあくまでも教育委員会社会教育・文化財課の分室であったが、保存処理部門を設置するなど、その後の県内での埋蔵文化財調査・研究の拠点となった。特に発掘調査報告書を作成するための出土品整理の体制は充実し、小さいながらも展示室もあり、ほそほそではあったが毎年企画展示も行っていった。しかしながら膨大な量の発掘調査成果や出土品を十分に活用するには至らず、本格的な活用施設整備が大きな課題となっていった。

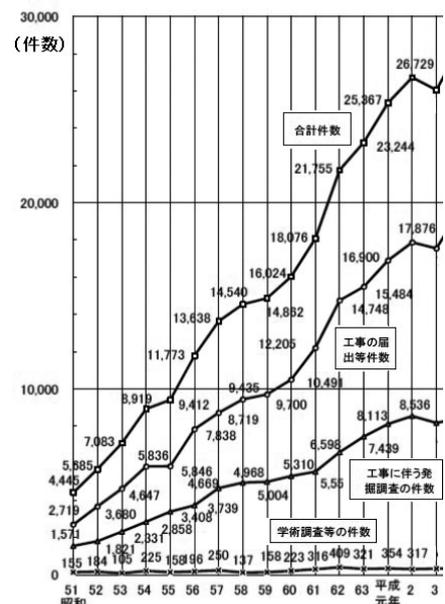


図1 激増した国内の発掘調査件数

## 2 考古博物館整備検討の開始

このような中、兵庫県では昭和58年4月に歴史博物館を、平成4年10月に人と自然の博物館を開館して、歴史系、自然系ともに博物館を整備しており、歴史博物館には考古学専門の学芸員も配置されていたが、広大な兵庫県における発掘調査成果を活用するにはまだ不十分だった。

このため、平成5年（1993）12月には、兵庫県文化財保護審議会から「こころ豊かなふるさと「兵庫」づくりの推進－文化財保護の当面の課題－」が提言されたが、その中で考古博物館整備の必要性について以下の通り述べられている<sup>(2)</sup>。

### ア 特色ある県立考古博物館の整備

埋蔵文化財については、しばしば開発を規制・制限するものとしてとらえられ県民の理解を得るのが困難な場合もあるが、他方、古代史を紐解く鍵となるような遺物が出土したりすると新聞などで大きく取り上げられ、県民に夢を提供するものとして歓迎される。とりわけ近年、考古学ブームとも言えるような人々の考古学に対する関心の高まりが見られ、近隣府県においては、出土品の展示を中心とする考古学専門の博物館が整備されつつある。兵庫県では、現在、明石架橋関連をはじめとして大規模プロジェクトに伴う多数の発掘調査が実施され、貴重な出土品が蓄積されつつある。こうした発掘調査の成果については、その都度、現地説明会を行うとともに、埋蔵文化財調査事務所において速報展を開催するなど公開に努めているが、展示スペースや系統的な展示などの面で十分とは言えない。このため、兵庫県においても考古学専門の博物館の整備構想について積極的に検討する必要がある。この場合、わが国最多量の木器が出土していること、古くから首長の石棺や須恵器を多数生産していることや各種の街道を通じ東西交流の舞台として栄えたという兵庫県の考古学上の特色等を生かしつつ、県民が考古の世界を体験できるような夢のある施設として整備することが望ましい。また、その際、近隣に埋蔵文化財のフィールドを確保し、学術調査や野外での教育普及活動に活用するなど埋蔵文化財を総合的にとらえることができるような仕組みを工夫することが求められる。

県教育委員会ではこの提言を受け、平成5・6年に埋蔵文化財の有効な活用方法について、当時文化財保護審議会の委員を務められていた石野博信さんを座長とする有識者による検討委員会を設置しその方向性をまとめつつあったが<sup>(註2)</sup>、そのさなかに平成7年1月17日に阪神・淡路大震災が発生したことで一時頓挫した。

震災からしばらくたち復興に向けての道筋が見え始めてきたころ、震災からの創造的復興の象徴として県立芸術文化センターと県立新美術館（芸術の館）の整備が決まった。当時はその他にも、初代兵庫県庁が置かれた兵庫の歴史資料館や、兵庫ゆかりの文学館、故犬養孝氏にちなんだ万葉文化館などの整備構想も浮かび上がってきた。このうち兵庫の歴史資料館は用地問題が進まず、また万葉文化館は構想を断念（後に奈良県が整備）、文学館はバーチャルネットミュージアムとして整備されることになったが、考古博物館はというと、構想は具体化しないものの、平成9年（1998）頃には、播磨町大中遺跡隣接地、加西市玉丘古墳群隣接地、日高町（現豊岡市）但馬国府跡隣接地など、地元から誘致の声が挙がっていたほか、真偽はともかく埋立てが進む明石市大蔵海岸の名前も挙がっていた。

これらのうちの大中遺跡は、昭和49年（1974）以来「播磨大中国古代の村」として公開活用を進めてきた場所で、開園当初から県立博物館設置の要望があった場所であり、当時は唯一の県有の国指定史跡であった。大中遺跡は、地元播磨町でも昭和60年（1985）に播磨町郷土資料館を開館して積極的に活用を進めてきており、東播磨地区では相当数の小学校が遠足で訪れるなど、立地や交通の便を考えると博物館建設には最適地と考えられた。また建設用地についても、播磨町は「播磨文化ゾーン整備基本構想・基本計画」をまとめ、大中遺跡隣接地を独自に取得して誘致を進められていた<sup>(3)</sup>。このため平成10年に大中遺跡の利活用に関する検討委員会を設置して有識者から意見を聴取するとともに、地元での展覧会やシンポジウムなどの先行事業にも着手した。この検討委員会の座長をお願いしたのも石野名誉館長だった。当時石野さんは徳島文理大学教授かつ奈良県香芝市立二上山博物館館長で、兵庫県文化財保護審議会委員も務めていただいていた。翌平成11年度には石野さんを会長に、初めて県立考古博物館の名

前を冠した基本構想検討委員会を立ち上げたが、国の財政赤字の影響も受け県自体も行政改革に取り組む必要が生じ、考古博物館整備は進度調整が行われることになり少し足踏みすることとなった。

こうした中、平成12年10月に県文化財保護審議会から「次世代への継承と新しい文化の創造のために－21世紀における兵庫県の文化財行政について－」とする建議がなされた<sup>(4)</sup>。その中では考古博物館整備の必要性について以下とおり提言されている。

#### IV. 文化財行政の当面する課題と提言

##### (5) 県立考古博物館（仮称）構想の推進

次に、県教育委員会が進めている県立考古博物館（仮称）構想の早期実現による出土品の公開・活用の必要性であり、現下の文化財行政の最大の課題である。県立考古博物館（仮称）は、建設予定地が播磨町大中遺跡隣接地となっていることから、単に出土品を展示する施設ではなく、遺跡隣接型の特徴を生かして地域住民と連携した参加体験型博物館としての設置が望まれる。また、本県が地域的に広大な面積を有していることから、県立考古博物館（仮称）は県立館として県内の考古学の中核施設として位置づけ、県内所在の博物館や郷土・歴史資料館等をサテライトとして資料・情報の交流、巡回展の開催、共同調査・イベントの実施等を積極的に進めるべきである。幸い、県・市町では、現地説明会、土器づくりや勾玉づくりなどの各種体験事業、さらに「トライやる・ウィーク」などを通じての発掘調査体験など、普及事業が蓄積されており、県立考古博物館（仮称）自体の各種事業はもちろん、県立考古博物館（仮称）が市町実施のソフト事業の有機的連携の触媒機能を担うなど、創造的教育活動の場を提供し、全県に活動を展開する施設としての機能をもつことが望まれる。

### 3 基本構想、基本計画の策定

#### (1) 基本構想

平成12年は西暦2000年にあたり、兵庫県では当時の井戸敏三副知事を中心に「21世紀兵庫長期ビジョン」の策定に取り組んでいた年でもあったが<sup>(5)</sup>、翌平成13年7月に井戸知事が誕生したことで事業が動き始めた。平成14年度予算編成に向けて、当時の武田正義教育長から県立考古博物館（仮称）整備基本構想策定を進めるよう指示があった。また予算にはあげられていないが、県教育委員会として文化財全体の取り組むべき方向性を示す歴史文化遺産活用構想検討も併せて行うことになった。

この間、阪神淡路大震災後に県はもちろん国の財政事情の悪化の影響もあって、基本構想の検討には4年を要した。しかし整備ありきで拙速に事業を進めなかったことで、何のために今博物館を作らなければならないのか、何をするのかということについてじっくり考えることができたのも事実である。このことは基本構想検討委員会のある委員からも指摘されたのだが、そもそも何のために博物館を造ろうとしているのかが疑問であり、他の委員は大学教員や研究者でほとんどが公務員で、自分たちの利益だけを考えているのではないか、計画案に県民のために作るのだという理念が示されていないというものだった。たしかに当時我々のまとめた計画案は技術的な手法ばかりが並べられていて、理念が欠けていたのであった。博物館を作ることが目的となっていないか、考古学の研究成果は業界や一部の愛好家のためのものなのか、県民にはその情報を伝えてやるというような上から目線になっていたのではなかったのか。決してそんな意識ではなかったのだが、明確に示すことができていなかったのは確かでありメッセージが不足していた。こうしてまとめた基本構想の理念が以下の一文である。「県民が」と「先人たちの「知恵」と「生きる力」への「驚き・発見・感動」を得るとともに」を強調したものとなっている。

考古学が明らかにしてきた歴史を、県民が、気軽に本物の遺跡・遺物にふれることによって、先人たちの「知恵」と「生きる力」への「驚き・発見・感動」を得るとともに、身近な歴史文化遺産を見直し、地域文化を再発見することで、21世紀におけるあらたな「ひょうご文化」を創造することができることを目的として、従来にない新しいスタイルの県民参加型博物館として県立考古博物館（仮称）を整備する。

(1) 歴史文化遺産活用構想

この時、考古博物館の基本構想策定と並行して進めたのが歴史文化遺産活用構想検討だった。これは、先の文化財保護審議会からの提言を受けて、県教育委員会ではヘリテージマネージャー養成を開始し、考古博物館整備の計画を進めてはいるものの、文化財全体として向かうべき方向性を示しておらず、民俗や美術工芸品、史跡名勝天然記念物などの分野はどうするのかについて方向性を示せておらず、また考古博物館やヘリテージマネージャーがそこでどんな役割を果たすのかについても位置づけできていなかったことから、考古博物館整備を進めるにあたり必要不可欠なものと考えたのである。

こうしてまとめたのが歴史文化遺産活用構想である<sup>(6)</sup>。当時このような構想を示したのは全国でも兵庫県が初めてで、これを受けて文化庁では歴史文化基本構想という政策として打ち出された。この構想は単に理想的な計画を示しただけではなく、現在抱えていて課題に取り組んでいることを実践していくことに重点をおいた。翌年から3年かけて県内を6ブロックに分け文化財担当者の意見交換を行い、毎年全県での情報交換会を行った。実践を重視し、市町の枠組みを超えて地域ごとの連携を進めようとしたものだが、これは、阪神淡路大震災の後、当時の10市10町の埋蔵文化財担当者が集い意見交換を行ったり、播磨地区の埋蔵文化財担当者が勉強会を開催していたりしたことがベースにあり、一定の成果があったと思う。

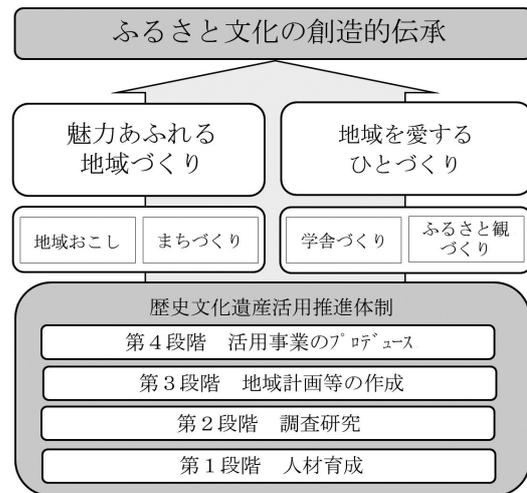


図2 歴史文化遺産活用構想推進イメージ

(2) 基本計画

翌平成15年度には、実質的に事業化の開始となる基本計画を策定した<sup>(7)</sup>。整備方針は以下のとおりで、「ネットワーク」「体験・思考」「変化・成長」という言葉をキーワードとして挙げている。

県立考古博物館（仮称）の整備は、単なる施設としての博物館づくりではなく、施設を核とした歴史文化遺産活用のあらたなシステムづくりを目的とする。すなわち県民が地域の歴史文化遺産への理解を深め、地域文化への愛着と誇りを高めるきっかけをつくり、さらに地域において歴史文化遺産の保護活用の主役として活動をおこない、地域の活性化に貢献できるシステムの構築を目指すものであり、県立考古博物館（仮称）はそのシステムの埋蔵文化財分野における兵庫県の中核施設として整備する。

このため、以下に掲げる「ネットワーク」「体験・思考」「変化・成長」をキーワードに、県民の思いや願いを十分に汲み取って、従来の博物館の概念を超える、21世紀にふさわしい新しいスタイルの博物館を創造する。

博物館の来館者はすべての世代を見据えてはいたが、メインターゲットは子供においた。それは、博物館を建設する大中遺跡は、東播磨地区の多くの小学校が遠足や歴史学習で訪れる場所であったからである。昭和37年（1962）に当時の中学生が大増畑で土器を発見したことをきっかけに保存運動がおこり、県が土地を買い上げて史跡指定したもので兵庫県の文化財保護行政の中でも特筆すべき場所でもあったが、そうした地域の思いが子供たちに伝えられているのだ。

このため、博物館を整備するにあたっては十分なりサーチを行った。広大な遺跡公園があることや、最寄りの鉄道駅であるJR土山駅からは旧別府鉄道の線路敷を転用した遊歩道「であいの道」が整備されていて遠足の場所としてはふさわしい場所であった。しかし、郷土資料館は延べ500㎡程度と狭いため、人気のまが玉づくりは遠足など多人数だと屋外で行うため雨の日は対応できないし弁当を食

べる場所もない。また復元竪穴住居が2棟しかなく古代の雰囲気物が足りないことや、大人が来てもお茶を飲む店舗もないなどの課題が浮かび上がっていた。

そこで、これらの課題に答えられる施設を整備するべく計画を進めた。施設の規模は財政当局から陶芸美術館の4,300㎡なみにとどめるよう求められていたが、埋蔵文化財調査事務所を併設することや不足する収蔵庫対策を加え8,370㎡となり、歴史博物館を上回るものとなった。中でも特に体験学習を重視していることから、池上曾根遺跡に隣接する和泉大津市池上曾根弥生学習館を参考に、体験学習室の広さを確保した点が特筆できる。

### (3) 人材養成

考古博物館運営で欠かせないのは人材養成だった。平成13年に県教育委員会で建築士を対象としたヘリテージマネージャー（歴史文化遺産活用推進員）養成が始まったが、考古博物館構想はまだ先が見えなかった。ところが14年度当初予算の知事査定で、先行事業に取り組むよう指示があり徹夜で案を考えた。教育長からは大中遺跡を発掘して新しい発見があれば事業も動くのではないかと提案もあったが、事業に発掘調査を組み込むとしてもそれだけでは先行事業にならないため、人材育成を中心に据えることにした。ヘリテージマネージャー制度創設の背景としては、文化財建造物の分野には県内には県、神戸市、姫路市に書く1名ずつ計3人しか専門職員がいなかったので専門人材の養成は急務だった。一方で埋蔵文化財の専門職員は当時210人ほどがいたが、県もそうだがいずれの市町でも発掘調査に忙殺されて普及啓発などに取り組む余裕がなく、またノウハウも不十分だった。そこで、こうした専門職員をサポートする人材育成をすべきではないかと考えていたこともあって、考古博物館の活動を支えながら地域で活動する人材を育成する、そのきっかけとして大中遺跡の発掘調査も手がけるという事業の組み立てを考えた。事業名称は同僚がアイデアをくれた。その前年に当時の東播磨教育事務所の故中野直行所長の発案により共同で取り組んだ「東播磨ふるさと歴史学習事業」にヒントを得たもので「考古楽者養成事業」と名付けた。楽しみながら考古学に取り組むという意味を込めたものだ。

平成14年から始めた講習会には募集定員を大きく超える方が応募された。厳正な抽選により受講者を決定したこともあって、3年たっても当選しない方もあったほどだった。当時研修を担当した埋蔵文化財調査事務所普及活用班職員の熱心な指導もあって、発掘調査だけではなく体験学習メニューでも着実に力をつけられた。講座の最終日にはまだ博物館ができるまで5年もありどうしたらいいのかと途方に暮れる方もあったが、その時担当されていた先輩の種定さんの言葉が印象深かった。我々は公務員なのでずっと博物館にいられるわけではないが、皆さんは自分の意志で取り組める。「考古楽倶楽部」を結成して自分たちの意志で取り組んでいただきたいというものだった。そこからは技術の研鑽に取り組みながら県内各地の学校や現場へ実践へと展開され開館に備えられ、現在に至っている<sup>(8)</sup>。

## 4 事業着手

### (1) 建築設計

平成16年度には建築設計者を公募したところ全国から36社の応募があった。選定委員会による第一次選考では書類選考により6社が選ばれ、2次選考に向け具体的な提案を求めた。この結果、最も高得点を獲得した株式会社昭和設計が選ばれた。提案のあった建築設計のコンセプトは、国指定史跡大中遺跡公園の隣接地にふさわしく高さを抑え、屋上も緑化し公園内の遊歩道から周回できるものだった。ここから、提案を具体化するために設計業者と詳細な検討を進めた。かつて周辺に高い建物がな

かった昭和40年代には遺跡公園から海が見えていたことから展望塔を設け、遺跡公園はもちろん播磨灘や淡路島、小豆島まで遠望できるようにした。冬場の空気が澄んだ日には四国の山並みが見えることもある。

展望塔の外観は弥生時代の独立棟持柱建物の構造を採用した。また屋外から続く地層の壁は地中に埋もれた遺跡の中に入っていくイメージで重要なコンセプトであったため設計事務所とは何度も打合せをした。設計者からの提案は日本古代からの伝統的工法である版築工法だったが、現場から採取できる土は基本的に砂礫で、何度も試作を重ねたがうまく仕上がらなかった。そこで版築工法は断念して地層をイメージしたものとした。大中遺跡は7万年前頃に形成された海成の砂堆層の上に立地しているので、その地層を再現したわけではないが、事前の発掘調査では喜瀬川方向からの洪水堆積層も見つかったので、東側からの河川からの堆積や流れを意識した微高地や後背湿地を盛り込んだ地層のイメージとした。

建物内部の各部屋は、大中遺跡の特徴である全国的にも珍しい多様な竪穴住居の形をイメージして、円形、六角形、四角形、長方形を散りばめた。また、館の運営には体験学習に重点を置いていることから、体験学習室を学校単位、クラス単位でも利用できるよう3室に分け、公園側の2室は公園と直接出入りできるよう開放的なものにした。

## (2) 展示設計

展示設計についてもプロポーザルとしたが、博物館展示は特殊なものであることから、博物館展示工事実績のある6社を指名して選定委員会で選考し、株式会社乃村工藝社が選ばれた。

展示室は、メインの常設展示室と特別展示室に加え、考古学の基本を知ってもらうための部屋を設けた。発掘ひろばと名付けたこの部屋には、事前の発掘調査で見つかった竪穴住居跡を剥ぎ取って展示している。余談だがこの部屋は2008年のグッドデザイン賞を受賞した<sup>(9)</sup>。

考古学情報プラザは平成4年に亡くなられた我々の大先輩松下勝さんのご遺族から寄贈を受けた考古学に関する蔵書を中心に、考古学に関する基本的な書籍や兵庫県内の発掘調査報告書が閲覧できるよう配架した。またここでは遺跡に関する情報が検索できるパソコンを配置し、子供向けのゲームも10種類開発したが、単なるゲームではなく遊びながら常設展示を理解するための入口としたものであった。

常設展示をどうするかは最も難しい課題だった。基本計画段階から検討を進めたが、なかなかうまくまとまらず、設計段階で大きく見直すことになった。県立歴史博物館が通史を重視していたことから、テーマを重視した展示構成とすることとして計画を進めていたのだが、同時に進行していた歴史博物館の展示リニューアルが通史展示をとりやめたため、ある程度通史を意識したものとする必要が生じた。そこでテーマは変えず、人、環境、社会、交流の4つのテーマの中で、旧石器、縄文、弥生、古墳、古代と時代の流れを追えるよう工夫した<sup>(10)</sup>。



図3 (株) 昭和設計の提案パース図



図4 発掘ひろば

### (3) 公開イベント

展示工事では、大型の展示品については製作段階でその意味を知ってもらうのと博物館整備のPRを兼ねて公開イベントも合わせて行った。

古代船の復元にあたっては出土資料をもとに忠実な復元に努めたが、特に材を確保するのに苦心した。近年では製材されてから国内に持ち込まれるのがほとんどで、巨木の丸太材自体が少なかったのである。ようやく見つけた材は大阪南港にあった。一般に手に入れるにはこれが最後までいわれた材の直径は約2m、長さは15mあった。さらにこの材を加工するには名古屋港まで運んで加工し、船を製作できる造船業者も地元こだわりのやっと思つた浜坂町諸寄の尾崎造船所をお願いした。出来上がった船は本当に浮かぶのかという疑問の声があったのと、どんな風に浮かぶのかを確認しておきたかったこともあって、お披露目を兼ねて諸寄港内で地元香住高校水産課の生徒たちに漕いでもらった。重心が高いことはわかっていたので、バラストとして1トンの水を底に入れたがそれでも重心が高かった。真っ直ぐ進むには良かったが、旋回しようとするとうんと傾いてヒヤッとしたが、生徒たちは上手く乗り切ってくれた。少し改良すればこの船で外洋を航海するのも可能だと感じた。

また、家形石棺の復元には地元の竜山石を使った。初めに採取した石は地表面に近い黄色い部分と地中の青い部分が混じっていたためもう一度採り直してもらった。古墳時代の石棺は手作業で浅い部分から採取しているのでみんな黄色いのだ。出来上がった石棺はお披露目を兼ねて修羅というソリを使って引張った。コロという丸太を使うと楽に引けるのはわかっていたが、横滑りして事故を起こすと大変なので地面にそのまま置いて引張った。高砂市運動公園のイベントには沢山の方が見学に見え、大人100人で引くと動くことが確認できた。また、博物館前広場でも地元の小学校2校に参加してもらい石棺引きを行った。それぞれの学校の児童100人余りが引いてもびくともしなかったが、両校一緒に引くと見事に動いた。これほど上手いくとは驚いた。なお、修羅の材には大中遺跡公園内で育った二股のクスノキを使用しており石野館長にも率先して参加していただいた。



図5 考古博物館前体験広場で行った石棺引き

### (4) 開設準備

建築工事が進む平成18年度には公式に考古博物館開設準備室が設置され、具体的にどんなこと取り組むのかについて、事業計画策定委員会を設置して検討を行った。石野さんには文化財保護審議会の会長を退任して、教育委員会の参与に就任していただき、直接指導いただくことになった。正式に館長に就任を公表したのは平成19年の3月だった。

博物館の展示では石野館長の意にそぐわない箇所もあったのだが、これはこれでいいが考古学の研究はしっかりやれと言われたことをはっきりと覚えている。いくらわかりやすく間口を広げて楽しめる博物館を作ったとしても、アミューズメントパークではないのだから集客することが目的ではない。しっかりとした調査研究に裏付けられたものでなければ意味がなく、わかりやすい展示を通じて少し興味を持ってもらったその先に理解を助ける手法がなければならないのであり、そのことをあらためて肝に銘じた。このころには、博物館のキーワードとしては館のイメージをわかりやすく伝えるため、参加体験、ネットワークのふたつに絞った。

### (5) シンボルマークデザイン

シンボルマーク作成に当たっては一般公募する場合もあるが、他館の事例では必ずしもうまくいっ

ているとは限らなかったことから、兵庫陶芸美術館のシンボルマークやアシックスなどのブランディングを手掛ける株式会社TCDのグラフィックデザイナー山田崇雄さんをお願いすることにした。山田さんには建築中の博物館を視察してもらい建築のコンセプトの確認とともに、かなり時間をかけて、博物館のコンセプトを伝えた。山田さんは、「温故知新」と言うことですね？と一言漏らされた。しばらく経って案が出来上がってきたが、それは2つの掌を組み合わせたものだった。下向きは茶色で過去から学ぼうとする手、上向は緑色で未来を掴む手だそうだ。シンプルな図案が提示されるものと予想してただけに少し驚いたし、これでいいのかと不安になった。しかし、添付されたマニュアルを見ながら多様な図案の展開のしかたを見ていると、徐々にその良さがわかってきた。というよりもその素晴らしさに感激したと言った方がいいだろう。これこそ我々が求めていたものであって見事に示した図案なのだ。そこから展示の最後を締めるメッセージ作製に取り掛かった。常設展示室出口の映像コーナーである。さまざまな災害や事件を乗り越え、過去の経験を未来に活かしていこうというものである。ここに考古博物館設置の目的を示すことができた。



図6 シンボルマーク

## おわりに

振り返ってみると、反省点として、人、環境、社会、交流という人類共通のテーマにこだわったが故に、考古学の目指す方向性は示せたが、当初の構想にあった兵庫県の多様性や地域の特色を示すということがほとんどできなかった。その部分は企画展示の中で補っていかうということではあったが、やはりメッセージが不足しているように思われる。筆者は現在兵庫の歴史資料館構想を進めた「兵庫津ミュージアム(仮称)」整備に関わっているが、ここでも兵庫五国の多様性をいかに表現するかに苦心している。やはり単独の館でメッセージを伝えきるには限界があるので、今後は考古博物館がコンセプトに掲げている「ネットワーク」を強化し、県内各地の博物館・資料館等が連携することで役割を果たしていけるのではないかという思いを強くしているところである。

### 【註】

- (1) 「座談会「実証実験・兵庫県立考古博物館の誕生～新しい参加体験型展示の模索～」の記録」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第11号 2018年3月 兵庫県立考古博物館
- (2) 「こころ豊かなふるさと兵庫づくりの推進 -文化財保護の当面の課題-」1993年12月 兵庫県文化財保護審議会
- (3) 「播磨文化ゾーン整備基本構想・基本計画」1997年3月 播磨町
- (4) 「次世代への継承と新しい文化の創造のために -21世紀における兵庫県の文化財行政について-」2002年10月 兵庫県文化財保護審議会
- (5) 「21世紀兵庫」長期ビジョン」2001年3月 兵庫県
- (6) 「歴史文化遺産活用構想」2003年3月 兵庫県教育委員会
- (7) 「県立考古博物館(仮称)基本計画」2004年3月 兵庫県教育委員会
- (8) 『考古楽倶楽部10周年記念誌』2013年3月 ひょうご考古楽倶楽部
- (9) 註1 文献
- (10) 中村弘「古墳時代準構造船の復元」兵庫県立考古博物館研究紀要』第5号 2012年3月 兵庫県立考古博物館

### 【挿図出典】

- 第1図 『令和元年度埋蔵文化財関係統計資料』2020 文化庁11p  
 第2図 「歴史文化遺産活用構想」2003兵庫県教育委員会をもとに筆者作成  
 第3図～第6図 考古博物館提供